

父の戦争体験

太田邦夫

【入隊】

私は毎年八月十五日が近づくと、終戦前後の様々な体験を思い出す。

昭和十九年六月六日、郷里（静岡県磐田市）の村役場から召集状が届いた。

小柄で貧弱な体だった私は、学校を卒業すると同時に丙種と認定された。丙種は兵役義務のない所轄第二国民兵である。だから当時戦況がいかに不利とは言え、自分の所には赤紙（召集状）は来ないだろうと思っていたがとうとう来たのである。この時、私はすでに三十四才、二人の子供は何れも幼く、しかも妻は三人目の子を身ごもっていた。

当時は静岡市に住んでいたが召集が来たと同時に妻子を母の住む郷里へ疎開させた。六月十五日、浜松市の郊外にある新津村の部隊に入隊した。入隊したばかりの初年兵は、七（八名のグループに分けられ、数日後には行先を知らないまま移動することになった。我々はいよいよ海を渡って遠い外地に送られるのではないか。もしそうだとしたら体格が貧弱な自分には、とても生きて再び内地の土は踏めないだろうと思った。そう考えると急に心細くなり、疎開している家族や友人達の事が思い出されて胸が詰まった。

長い事、汽車に乗せられてやっと着いた場所は和歌山県潮岬であった。当時の戦況は日本にとって不利になっていたが、血の気の多い若い同年兵の中には、外地派遣を志願する者や将校を夢みて幹部候補生の試験を受ける者がいた。だが、我が小隊は潮岬の警戒隊として内地勤務であることを知らされて内心ホッとした。小隊の任務は、我が本土を来襲せんとする敵機をレーダーでいち早く捕捉し、無線電信で大阪千里山の本部に速報する事である。敵機の捕捉から無線で本部に送達する時間は、常に二十秒とかからない迅速さが要求された。勤務は昼夜二交代で、上番時（勤務中）は別として下番時（勤務外）の行動は自由でのんびりしたものであった。レーダーといっても、現在の器械と違って構造性能は極めて幼稚で、折角捕捉しても、敵機は既に本土上空へ侵入していることがしばしばある。私はここで数か月を過ごした後、今度は高知県の室戸岬へ転属となった。

父の戦争体験

十九年の八月である。我々がいる小さな兵舎は岬の突端の小高い丘陵を切り開いて設営されている。すぐ近くには明治維新の志士「中岡慎太郎」の大きな銅像が太平洋の彼方をにらんで立っている。海中に点在する、奇岩怪石に黒潮が白い牙をむいて挑む景観はまことに雄大である。夕方になると真っ赤な太陽が渺茫たる大海原の水平線に静かに沈んでい

く姿は何ともいえない荘厳なものである。

我々は勤務のない時は、海に出て泳いだり古年兵の引率で近くの民家へ食料の買い出しに出かけたりした。このあたりは米の二毛作地帯なので、今頃の季節になると各農家では田植えと稲刈りの作業が同時に行われる。我々兵隊はあらゆる情報に関して、常につんぼ機敷に置かれていた。世間の出来事も、現在の戦局についても全く分かっていない。

よく晴れたある日の午後、誰かが「アッ、B29だ」と叫んだ、屋外に出て空を仰ぐとはるか上空に機体を銀色に輝かせながら白い飛行雲を引いて悠々と飛び去って行くのが見えた。敵機を見たのはこれが最初だった。

B29のあの悠然たる姿に一種の感動を覚えた。翌年（昭和二十年）の二月に我々はまた転属した。今度は四国山脈を横断する土讃線最大の難所と云われた大歩危、小歩危に近い天坪という所であった。ここは、すり鉢の底のような所で周囲の山に遮られているため、一日のうち太陽の光がさす時間は極めて短い。見上げる空の視野も狭い。人家は僅か十数軒で寂しい村落である。

我々が勤務につくレーダー小屋は、すり鉢底の兵舎から松の林や楓の灌木を縫って一時間ほど登った山頂にある。山頂からは土佐山田や高知の市街が遠くまで見下ろすことができる。林の中から鶯や山鳥の鳴き声が、静寂な山の空気に伝って心地よく聞えてくる。

室戸岬の海も良かったが、この山の雰囲気も決して悪いものではない。

山を上り下りすると軍靴の前に突然、マムシが飛び出してビックリさせられる事が何回もあった。人里離れたこの山間で生活していると、果たして自分は今でも兵隊なのだろうかと思うことさえある。

毎日単調な勤務の繰り返しを続けていたが、ある日の夜、レーダー小屋の上空から、もの凄い爆音が聞こえた。レーダーが激しく作動して、多数の敵機襲来を伝える。爆音はいつまでも続いている。そして、この小屋の上空を旋回している。さて、我々の所在を察知されてしまったのではと思ひ、一瞬青くなった。そのうち誰かが「高知の市街がやられていく」と大声で叫ぶのが聞こえた。小屋の外に飛び出して見ると高知市街が一面火の海となつて夜空を焦がしている。そして時々、火焰が高く吹き上げるのが見える。その状況から市民達は焦熱地獄の中で難を逃れようとして逃げ惑う様子が目に浮かんでくる。けれども自分には何の力も貸してやれない苛立ちの気持ちを持ちながら、ただ茫然と眺めるだけである。一夜明けてこの山の周辺は何事もなかったかのようにまた元の静けさに戻っていた。悪夢のような敵機の爆撃を目の当たりにしたのはこれが最初であった。

この山中で、これまで平穏に過ごして来た我々にも、日本の戦況がいよいよ不利になっていることを強く感じられるようになった。

【外泊】

七月が過ぎ、八月に入って私は入隊以来、初めて五泊六日の外泊許可をもらい郷里の家族達に会うことが許された。

小隊長への申告もそこそこ、天坪の小駅へ急いだ。土讃線はトンネルの数が非常に多く、蒸気機関車の煙が車内に吹き込んでくるので乗客の顔は汗と煤煙で薄黒く煤けている。列車が高松駅へ着いた時は、一刻も早く家族達に会いたい気持ち一杯で、自分の顔や軍衣の汚れなどは問題ではなかった。

宇高連絡船で瀬戸内海を渡って、漸くして本土の宇野駅に着いたが、ここから更に山陽線、東海道線と乗り継いで行かねばならず、郷里の中泉駅（現在の磐田駅）までの鈍行列車の旅はまだ長い。

乗った列車が名古屋駅の構内に入ったので、昼の弁当を買おうと思ひ窓から首を出したらホームの人達が何か小声で話し合っているのを何気なく聞いて「オヤツ」と思った。どうも話の様子では日本がアメリカに無条件降伏をしたという事らしい。果たして本当だろうか。これが真実ならば、命だけは助かったと思ひ内心素直にうれしかった。

車内の乗客達はこの事をまだ知らないでいるようだ。外泊の途上にある私は軍人の身である。うかつに口外は出来ないと考え、そのまま黙っていた。丁度この日は八月十五日である。浜名湖を過ぎて目的地の中泉駅へ着いた時は、もう夜になっていた。駅前の街並外れから、私の家まで約四キロあるが人通りの絶えた真つ暗な農道を歩き続けた。

そして、一年数か月振りの母と妻子は健在であった。私の元気な姿をみて皆非常に喜んでくれた。応召した時は妊娠中だった妻は既に身二つになっていた。女の子である。我が家で二、三日のんびり過ごしたが、私は外泊許可の期限が切れる前に原隊へ戻らねばならない。母は「戦争は終わったというのに……」といかにも心残りな様子であった。長男で男一人の私には母の気持ち痛いほどよくわかる。私を見送ってくれる家族達と一緒に駅まで行くと復員して帰るこの町の通信部隊達で大変混雑していた。彼らはそれぞれの故郷へ、私だけは原隊へと、何という皮肉な事だろう。突然待合室で家族と談笑していた私に予期していないアクシデントが起きた。私はどうしたわけか、急に腹痛を覚えたので駅のトイレに行くため腰にぶら下げていた短剣と帯革を一緒に外してベンチに置き、家族の者に監視を頼んだ。

トイレに入り、しばらくして戻ってみると、短剣だけ残っていて肝心の帯革が見当たらない。私は青くなって周囲を探し家族を問い詰めたが後の祭りである。

家族は恐らく、大勢の復員兵達に気をとられ監視するのを忘れていたのだろう、さあ困ったことになった。これが平常時だったら、私は原隊に帰れば軍律によって間違いなく営

倉（軍の監獄）入りである。半ば諦めながら、残った短剣を隊から持ってきた私物箱に包んで帰るよりしかない。

大勢の復員兵達の誰かが混雑に紛れて密かに抜き取ったに違いない。当時、軍隊では本革製品は非常に貴重な物品で、我々の隊でも日常の帯革は全て代用品を使用していた。

今日の私のように外泊等で外部の民間人の目にとまる場合に限って、本革の帯革を隊が貸与する慣習になっていた。その貴重な帯革を私は盗まれてしまった。軍隊生活において、我々は軍の官物は全て「天皇陛下からの預かり物」という観念を常に植えつけられており、それを紛失する事は勿論、損傷する事さえ許されなかった。しかし、もう戦争は終わっていたのだ。たとえ官物を盗まれても営倉へ入れられるようなことはないだろうと、自分に言い聞かせて私は列車に乗った。一緒に乗った大勢の復員兵達に混じって二ツ星の肩章を付けているのは私だけである。一等兵の階級章だけ付けて腰に短剣を吊っていない兵隊の格好はどう見ても様にならない。我ながら誠に惨めで気の引ける思いがした。とにかく、外泊を終えて原隊に戻る私は、前と逆に列車に乗って西に進む。

車内の座席も、通路も網棚までも復員兵と彼らの持ち込んだ大きな荷物で身動きが出来ない、うだる様な暑さに乗客は死んだようになって寝込んでいる。汗臭くてやり切れない。翌朝、ようやく宇野駅へ着いた。私は、ここから更に四国へ渡らなければならない。

【復員】

高松港からの連絡船が丁度港に着いたらしく、棧橋は降りる人達で非常に混雑していた。私はこの船に何としても乗り込まないといけない。いつ高松へ渡れるか不安だったので、夢中で棧橋を歩いていると、不意に私の肩を叩いて声をかける人がいた。見ればそれは顔見知りの天坪小隊の古年兵達であった。そして彼らは何れもみすぼらしい服装をしていたのに驚いた。私に「お前は何処へ行くんだ」と聞くので、「丁度いま外泊から帰りで原隊へ戻るところだ」と言うと「俺たちは四国から来たばかりだが、お前もここから直ぐ引き返して故郷へ帰れ、天坪小隊は解散して、もう誰もいない、お前の持ち物（私物及び官物）は民家に預けてある、郷里へ帰ってから機会を見て取りに行けばよい。なんでも敵が近く四国に上陸する噂がある、お前もいま行ったら危険だ。俺たちは軍服を脱いで民家から古着を貰って目立たないようにして帰るところだ」と話してくれた。

私は彼らの忠告に従って、再びまた郷里へ戻ることにした。そして、ここで彼等に会えた幸運を神に感謝した。もうこれであの『忌まわしい帯革盗難』による私の営倉入りの懸念は一切消滅する、気が軽くなった。

帰りの上り鈍行列車は停車するたびに復員兵が乗り込んで既に超満員になっている、難儀な長旅の末、疲れて切った体で再び郷里の駅に降り立った。家族は、私を見て「あれ、

どうしたの、何かあったの」と意外に思ったらしい。今度こそ原隊へ戻る必要がないので、私は体の休養と母の農作業の手伝いをして気楽に日々を過ごした。村では私以外にはまだ誰も復員した人はいない。自宅で平穏な毎日が一週間くらい続いたある日、私宛に突然電報が来た、それは「八月〇日〇時までには本部に集合すべし」と。

大阪千里山在る警戒隊本部からの出頭命令であった。何事だろうと思いつながら指定の期日に本部へ出頭してみると、私と同じ様に呼び出された人達が四、五百人集まっていた。

本部に集合したといっても我々は何もすることがない。毎日ぶらぶらして過ごしているだけで実に意味のない生活であった。